

ご参考にしてください

働き続けられる人文学部をみんなでつくるために **投票は12月13日**

1. 現在進行中の大学院博士課程、サテライトその他のとりくみについて、この間教授会等において、大学院博士課程構想やサテライト構想などが審議されています。これらは、全学的な機能強化構想を受けたものであるとともに、人文学部の教職員および学生、さらには将来的に入学する学生等に対しても大きな影響を与えるものです。これらのとりくみが三重大学人文学部における研究および教育においてどのような意義があるとお考えか、お示してください。
2. 現在、教職員組合人文学部支部は、研究条件を充実させるべく、サバティカル等の取得の保障や特任教員の研究費の増額等を求めています。これらは、それぞれの教員が研究者として成長していくために必要不可欠なものです。この点につき、あなたは学部の研究力を向上させるために、どういう見通しやプランをおもちか、お示してください。
3. あなたは、人文学部と地域イノベーション学研究科および教養教育機構との現在および将来にわたる関係につき、どのようにお考えか、お示してください。
4. この数年間にわたり、震災臨時減額、退職手当カット、55歳昇給停止、そして昨年の給与制度の総合的見直しにともなう俸給表改定という、この間の相次ぐ教職員の給与引き下げが強行されました。昨年は配偶者等扶養手当の減額が、また今年度は、退職手当の削減が予想されます。この点、どのように認識されているのかお示してください。
5. 防衛装備庁の「安全保障技術研究推進制度」につき、3月に日本学術会議が「まずは研究の入り口で研究資金の出所等に関する慎重な判断入り口で」判断し、疑わしい場合は大学を含む科学者コミュニティが判断するとした声明を発しました。この声明を受けて、各大学でガイドラインが策定されています。三重大学においても当然ガイドラインを策定することになると思われます。人文学部長としてどのような視点でとりくまれるのか、ご見解をお示してください。

学部長候補者への公開質問内容

年度の学部長は、12月13日 学部長候補者5名から、2018～19年度に実施される第二次大学への本来のあり方とは、教職員の士気を上げる機会が十分に活用されなかったのは、残念です。

票上位5位者に対して出した公開質問状に対する回答が返ってきました。2面に掲載します。2018～19年度に実施される第二次大学への本来のあり方とは、教職員の士気を上げる機会が十分に活用されなかったのは、残念です。

票上位5位者に対して出した公開質問状に対する回答が返ってきました。2面に掲載します。2018～19年度に実施される第二次大学への本来のあり方とは、教職員の士気を上げる機会が十分に活用されなかったのは、残念です。

学部長候補者5名から

回答がありました

2面に回答



三重大学教職組人文学部支部執行委員会

2017年12月 5日 (火) 第196号

津市栗真町屋町1577 三重大学人文学部内

編集・発行人 前田定孝

E-mail:kff02520@nifty.com

豊福裕二候補

学部長候補者からの回答です

この度は、学部長候補としてご指名をいただき、光栄に存じます。

しかし、学部長の大役は若輩の私には荷が重く、恐れ入りますが、辞退させていただきたいと考えております。

したがって、ご質問への回答は控えさせていただきます。

樹神成候補

学部長を2期、評議員を2期させていただきました。第4中期計画に向けた議論を開始すべき時期で、これから人文学部を担う先生方のご尽力に期待しております。「地方創生」は地方大学の意義を明確にする機会であるとともに地方大学の政策機関化の契機であるという二面性があると思います。要は、教員、学部、大学の主体性と力量だと思えます。私もこうした方向で教員として努力したいと考えています。

野崎哲哉候補

今回の学部長候補者に選んでいただき誠にありがとうございます。しかしながら、現在、副学長（学生総合支援・インターンシップ担当）の職に就いており、任期途中でありますので、今回の学部長選挙につきましては辞退させていただきたいと思えます。よろしくご理解のほどお願い申し上げます。

藤田伸也候補

いずれの問題も重要であり、状況を見極めて臨機応変に対応することが大切だと思えます。

遠山敦候補

お返事が遅くなり、ご迷惑をおかけしました。しかしながら、ご質問頂いた各項目について、いずれも定見をもっておりません。従いまして、申し訳ありませんが「回答しない」とさせていただきます（実質は「回答できない」ということですが）。どうかご容赦下さい。

安食和宏候補

1年8か月学部長を務めてきた立場として、今回の組合からの質問に対しては答えるべきだろうと思えます。

1. 大学院博士課程の設置は、全学の機能強化構想の一部を成すものであり、何とか実現できるよう取り組む必要があると思えます。またサテライト構想については、人文学部の実績（例えば伊賀連携フィールド）がより発展して、学部の教育研究を高められるものならば、その構想に乗って推進する価値はあると思えます。ただし、博士課程もサテライトも、結果的に教職員の負担があまりに大きなものにならないように考える必要があります。そして両者とも、一部教員だけの仕事ではなく、学部が全体として取り組むというような仕組みをもっと工夫する必要があると思われま。

2. 教員の研究活動の活性化は、当然重視されるべきことであり、サバティカル制度については、制度的な裏付け・支援が考えられてもよいと思えます。例えば、該当する教員の不在中の授業を担当する非常勤講師の予算を補填する等の措置です。また、2017年度に実施された研究成果の出版助成については、単年度のみとしないで、もう少し継続されてもよいと思えます。

3. これまでの経緯を踏まえて、人文学部と教養教育機構、地域イノベーション学研究科との関係は、今後も継続されるものと思われま。しかし、教員の配置換えと兼務により、人文学部の教員がすでに削減されており、今後の学部の運営に支障が生じたり、一部教員の負担があまりに大きくなる事態は避けるよう、注意すべきと思えます。

4. この件に関しては、学部として独自に対応するのは難しく、全学的に考えるべきことと思えます。

5. 今年度の本学の役員会において、防衛省の公募研究には応募しないという決定がなされており、今後もこの方針は変わらないと思われま。